

# 「ホメーロス研究会四十周年記念会」報告

生田康夫

二〇二三年十月七日「ホメーロス研究会四十周年記念会」を開催しました。

明治学院大学言語文化研究所「ホメーロス研究会（旧称…ホメーロス輪讀會）」は西脇順三郎の古典研究の流れを受け、一九八三年に発足しました。今年は四十年目にあたります。トロイア戦争十年の四倍、オデュッセウスの出征から帰還までの二十年に比べても二倍の期間です。その間、（夏季・春季の休みを除いて）毎週一回開催し、通算千百回を数えます。

記念会には、その活動に携わってこられた諸先輩や外部の関係の方々から、お祝いや励ましのメッセージをいただきました。リモージュ大学の Jean-Pierre Laver 先生、ベルリン自由大学の

Clement Lévy 先生、信州大学の野津寛先生、輪讀會創設メンバーで今は八ヶ岳山麓に住まわれている満田郁夫先生、それに駐日ギリシア大使館の Dimitris Camanisos-Tziras 大使からもいただきました。

また、ルーアン大学の Philippe Brunet 先生からはリラ伴奏付きのホメーロス朗唱が寄せられました。

記念会には、四十年間を通して輪讀會・研究会を支えて來られた工藤進先生を中心に、現行メンバー十人ほどが集いました。会では、メンバー各人による『イーリアス』全巻中最も鍾愛する一節の披露がありました。「第1歌冒頭」をはじめ、「ヘクトールとアンドロマケーの別れ」の箇所や、最終歌の「アキレウスとプリアモス対面」の箇所など多くの名場面が挙げられました。



記念会メンバー 渋谷にて

中には、プリアモスの馬車準備の様子を叙した箇所もありました。技術的・実務的手順が六脚韻の韻律に乗せてテンポよく語られる一節です。ホメーロスの持つ魅力の多様さに改めて気づかされました。

また、「グラウコスが語る人の世の比喩」の一節も挙げられました。

木の葉の生がそうであるようにそのように人生もある  
木の葉は風が地に降らせる、しかし木々は  
生い茂る、春の季節は巡ってくる  
その如くに人の血統はあるいは生まれあるいは滅びる

(第六歌146～149)

人間の生死に対する省察が、植物のそれになぞらえながら、簡潔かつ情感豊かに表現されています。そしてまたこの比喩は、四十周年を迎えた「ホメーロス研究会」の比喩でもあります。この会には四十年間に多くの先輩メンバーが参加し去って行かれましたが、会自体は継承されてきています。おそらく、人類が存続する限りホメーロスを読むこのような場は何らかの形で受け継がれていくに違いありません。

研究会では二十三年九月、改めて『イーリアス』冒頭からの読解を始めたところです。